

特集 未踏ユースから育ったタレントたち

9

アイデアを共有すること

荒川 淳平 東京大学大学院情報理工学系研究科

学生会員。2008年東京大学大学院情報理工学系研究科を修了。現在、同研究科の博士後期課程に在学中。2005年(株)インフォクラフトを設立。現在、同社代表取締役。専門はソフトウェアデザイン、システムソフトウェア。情報理工学修士。
arakawa@infocraft.co.jp

私は比較的未踏にかかわりの深い方だと思う。電気通信大学3年生のときに竹内郁雄教授(当時)の講義で未踏を知って以来、その年の未踏ユースに採択され、翌年の2005年には未踏のチームメイトで(株)インフォクラフト¹⁾を設立した。翌年には東京大学大学院で竹内研究室に入り、その年末には未踏ユースの同期かつ研究室でも同期となった浅川浩紀君と組んで再び未踏ユースに採択された。現在は、最初の未踏ユースで同期だった、笹田耕一先生の研究室に博士課程の学生として所属している。研究室周辺にも未踏経験者が多く、そのつながりは挙げなければきりが無い。

「未踏の良いところ」も挙げきれないほどたくさんあるが、今回は私の2度目の未踏ユースの話を通して「アイデアを共有すること」について考えてみたい。

大学院に入ってしばらく経ち、「データ管理」に対してもややとした不満を感じて、その解決策を日々考えていたある日、私は仮想ドライブを利用したデータ管理の方法を思いつく、「いける!」と確信すると同時に、芋づる式にアイデアが次から次に湧き上がってきて、どうにもこうにも議論したくてたまらなくなった。私はすぐさま浅川君に声をかけて、秋葉原のファミレスでその生まれたてのアイデアを勢いのままに話した。議論は盛り上がりになり盛り上がり、「これは世界を取れるぞ」と2人して興奮し、やたらしゃべったせいでのが湯いたのを覚えている。

生まれたてのアイデアを他人に話すというのは勇気のいる行為だ、ということに気づいたのはつい最近だ。自分が良いと思うアイデアほど他人に話すことが難しくなる。それは自分の発想力をさらけ出しているに等しいからだ。また、生まれたてのアイデアというのは、文字通り母親と胎児がへその緒で繋がっているように、発想した本人とひどく結びついてしまっている。なので、否定されれば本人も傷つき、無視されれば沈み込む。広告代理店経営者のCharles Blow氏はこう述べている。

「アイデアはとてもか弱い存在だ。嘲笑やあくびに抹殺され、皮肉の刃にかかり、冷たい表情に死ぬほど脅かされる」



ところが、当時の私は浅川君になんの武装もしていない裸のアイデアを話している。すこしぞっとする話だ。けれど、この一見すると無防備な行動は、未踏を共に経験した信頼感によって支えられているのではないだろうか。アイデアを産み育て、ソフトウェアを作り、それを世に出す、という経験(喜びや苦しみ)を私たちは共有している。そのことが、情報の検索が容易になり批評家が多くなりがちな現代においても、未踏を経験した私たちの中で、アイデアを共有することを可能にしているのではないだろうか。

ファミレスでの話の後、いくつもの選択肢の中から、最終的に私たちは2度目の未踏ユースへの応募を決めた。未踏ユースのブースト会議もまさにアイデアを共有する場だ。どんな人たちとこのアイデアを共有したいのか、結論は見えていた。共有することでアイデアが育っていくのだ。

未踏のその後について、まだ「世界を取った」には遠いけれど、未踏で開発したデータ管理システム(と私が博士課程で研究している分散ファイルシステム)は私の会社の売り上げの柱になっている。未踏の成果の一部をオープンソース化したDokan²⁾は世界中で数多くのオープンソースソフトウェアや商用製品・サービスで利用されている。

今後も未踏を通じて多くの素晴らしいアイデアが共有されていくことを確信し、その一端を担うことを楽しみにしている。

参考文献

1) (株)インフォクラフト、<http://www.infocraft.co.jp/>

2) Dokan、<http://dokan-dev.net/>

(2011年9月16日受付)